

## フランス語認知動詞の「se 構文」

曾我 祐典

### 0. はじめに

フランス語では、主語と同じものを指す代名詞 *me, nous, te, vous, se* (以下 *se* で代表させる) を動詞に添えて発話を構成することがある。たとえば、事行主体が同時に事行の対象でもある概念構造の事態は、(01), (02) のような「*se* 構文」の発話で表わす。

(01) *Tu t'es regardé dans la glace?*

(02) *Je t'ai rapporté ces catalogues. Je me suis dit que ça t'intéresserait.*

この場合、主体の「事行への二つ目の関与」を *se* で表示すると説明できるだろう。それに対して、主体が対象を兼ねていない (03), (04) のような場合に「*se* 構文」の発話を構成することがあるのは、説明がより難しい。

(03) *Claire s'imaginait qu'il était heureux à son nouveau poste.*

(04) *Nous nous doutons de l'embarras où vous vous trouvez.*

本稿では、言語実態の観察<sup>(1)</sup> とインフォーマントの面接調査<sup>(2)</sup> にもとづいて、どのような概念構造がさまざまな認知動詞の「*se* 構文」につながるか、これまでに論じたことを踏まえて<sup>(3)</sup> 統一的な記述を試みる。

以下では、*figurer, représenter, apercevoir* (1), *imaginer* (2), *douter* (3) の順に検討していくことにしよう<sup>(4)</sup>。

## 1. figurer, représenter, apercevoir

## 1.1. &lt;N + se + V + (de) N&gt; と &lt;N + se + V + que N Ind&gt;

事行の主体が対象を兼ねていない場合に, *figurer*, *représenter*, *apercevoir* を <N + se + V + (de) N> の統語形式で用いることがある。どのような概念構造に対応するか, 事行対象が同じ発話例 a, b を対照しながら考えよう。

- (05)a. Ces acteurs *figurent* chacun un personnage politique.
- b. Ces acteurs *se figurent* chacun un personnage politique.
- (06)a. Elles *représentent* l'avenir de l'enseignement du français au Japon.
- b. Elles *se représentent* l'avenir de l'enseignement du français au Japon.
- (07)a. Clarisse *a aperçu* quelque chose.
- b. Clarisse *s'est aperçue* de quelque chose.

発話者は, (05a) では「表わす (形 *figure* を与える)」という事行を, (05b) では「思い描く」という事行を表現している。(05b) で事行主体 “ces acteurs” が対象 “un personnage politique” を表わす (形を与える) のは, (05a) のように自分の外部においてではなく, 自分の頭の中においてである。

また, (06a) では「表わす, 体現する (現存状態 *présent* にする)」という事行を, (06b) では「思い描く」という事行を表わしている。(06b) で事行主体 “Elles” が対象 “l'avenir ...” を表わす (現存状態にする) のは, (06a) のように社会的場面など自分の外部ではなく, 自分の頭の中においてである。

さらに, (07a) では「感覚器官でとらえる」という事行を, (07b) では「気づく, 認識する」という事行を表わしている。(07b) で事行主体 “Clarisse” が事行対象 “quelque chose” をとらえるのは, (07a) のように自分の外部においてではなく, 自分の内部においてである。

事態を <que N Ind> で表わそうとする場合は、次のように <N + se + V + que N Ind> の統語形式の発話を構成する。

(08) La pauvre femme \*figure / se figure que dans trois semaines elle sera sur pied.

(09) Elle \*représentait / se représentait que son mari était assis à côté d'elle.

(10) Kim \*a aperçu / s'est aperçu qu'il s'était trompé de chemin.

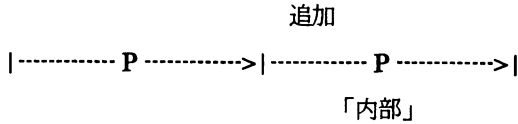
どの発話の場合も、事行主体が対象事態を「思い描」いたり「気づ」いたりするのは自分の内面においてである。

## 1.2. figurer, représenter, apercevoir の「se 構文」

上の (05)-(10) のような発話例を見ると、発話者は、事行主体が対象を認知するのが主体の外部であるときに通常の構文を用い、内部であるときに「se 構文」を用いると説明できそうである。しかし、主体の外部・内部が問題になるのは、たまたま *figurer, représenter, apercevoir* の表わす事行だからである。実際、これらの事行の場合に主体が対象を自分の内部においてとらえる（言い換えると、主体が「対象をとらえる場」を兼ねる）ということは、事行への主体の関与（打ち込み）が通常よりそれだけ多い・強い、ということにほかならない。そして、発話者は、主体の関与（打ち込み）に認められる通常の量・度合いを越える「追加」を *se* で表示すると考えられる。「内部」は、*figurer, représenter, apercevoir* の表わす事行の内容と「追加」の組み合わせから生まれる表現効果と言ってよい。

以上から、「se 構文」に対応する事態の概念構造は、次のように図示することができるだろう。横軸は、事行（対象 P を表す／とらえる行為）への主体の関与（打ち込み）の量・度合いを示す。中央の縦線より右側は、通常の関与を越える「追加」の部分を示す。

図 1



## 2. imaginer

### 2.1. <N + se + V + N> と <N + se + V + Inf / que N Ind>

上の 1.2. で述べたように、発話者は、事行主体が対象を主体の内部において認知する場合に「se 構文」を選ぶわけではない。そのことは、*imaginer* の用法を検討すればよりはっきりするだろう。この動詞が表わす事行「思い描く（頭の中でイメージ *image* を作る）」は、はじめから「頭の中で」という要素を含んでいるから、発話者が「内部」を表示するために *se* を用いると考えることはできない。

通常の構文と「se 構文」を比較しよう。

- (11)a. Ces étudiantes *imaginent* un avenir radieux.  
       b. Ces étudiantes *s'imaginent* un avenir radieux.
- (12)a. Ces étudiantes *ont imaginé* une solution au problème.  
       b. Ces étudiantes *se sont imaginé* une solution au problème.

インフォーマントによれば、発話者は (11a), (12a) でそれぞれ対象 "un avenir ...", "une solution ..." を事行主体 "ces étudiantes" が思い描くこととして提示しているが、事行主体が発話者以外の人物であるために、ときに「発話者は、対象が現実性があると考えていない（事行主体の想像の産物にすぎないと思っている）」という表現効果が生まることがある。

これに対して、(11b), (12b) では常に「発話者は、対象が現実性があると考えていない（事行主体の想像の産物にすぎないと思っている）」という表現効

果がある。これは、発話者が、対象を、事行主体が自分の主観世界の中心部で思い描くこととして提示していることによる。事行主体が発話者以外の人物であることに加えて、他者にはアクセスできない「自分の主観世界の中心部で」という要素があることによる。

通常の構文と「se 構文」の差異がさらにとらえやすいのは、事行対象が事態であってそれを <que N Ind> で表わす場合だろう。なぜなら、その場合は事行主体によるとらえ方と発話者のとらえ方とのあいだにずれがあれば目立つからである<sup>5)</sup>。

- (13)a. Kim *a imaginé* qu'elle accepterait cette proposition.
- b. Kim *s'est imaginé* qu'elle accepterait cette proposition.
- (13')a. J'*ai imaginé* qu'elle accepterait cette proposition.
- b. Je *me suis imaginé* qu'elle accepterait cette proposition.

インフォーマントによれば、(13b) だけでなく (13'b) の場合も、常に「発話時点で発話者は、対象事態の生起蓋然性が高いと考えていない（事行主体の想像の産物にすぎないと思っている）」という表現効果がある。これは、発話者が、<qu'elle accepterait ...> という事態を過去の一時点において（つまり、発話時点の自分ではない人物が）主観世界の中心部で思い描いたこととして提示していることによる。

主動詞が現在形以外の場合には、考慮すべき要素が増えて「se 構文」がどのような概念構造に対応するか見きわめるのがそれだけ複雑な作業になるので、現在形の用例を見ていくことにしよう。

- (14)a. Clarisse *imagine* que tous les garçons du quartier sont amoureux d'elle.
- b. Clarisse *s'imagine* que tous les garçons du quartier sont amoureux d'elle.
- (15)a. Kim *imagine* qu'il obtiendra l'argent sans difficulté.
- b. Kim *s'imagine* qu'il obtiendra l'argent sans difficulté.

インフォーマントによれば, (14b), (15b) では, 常に, 「発話者は, 対象事態の蓋然性が高いと考えていない(事行主体の想像の産物にすぎないと思っている)」という表現効果がある。これは, 事行主体が自分の主観世界の中心部で思い描くこととして対象を提示していて, 「自分の主観世界の中心部」が他者にはアクセスできないことによる。

事行主体が発話者自身である現在形の用例も見ておこう。

(16)a. *J' imagine qu'elle est complètement débordée.*

b. *Je m' imagine qu'elle est complètement débordée.*

インフォーマントの多くは, a, b 間に顕著な差異は認められないと回答する。おそらく, 対象事態が「自分が思い描くこと」であるか「自分の主観世界の中心部で思い描くこと」であるかの違いが微細なものと感じられるためであろう。DUCROT (1980, p. 272) の指摘のとおり (16b) のような発話は特殊な使用条件を要すると考えられるが, 本稿では論じない。

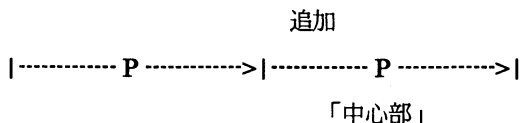
## 2.2. imaginer の「se 構文」

(11)-(16) からは, 発話者は事行主体が対象を, 単に「頭の中で」思い描くのではなく, 自分の主観世界の中心部で思い描くことを表わすときに「se 構文」を用いると説明できそうである。しかし, 「中心部」が問題になるのは, たまたま *imaginer* が表わす事行の内容のためである。実際, この事行の場合に主体が対象を思い描くのが単なる「頭の中」ではなくより深い「主観世界の中心部」ということは, 事行への主体の関与(打ち込み)が通常よりそれだけ多い・強い, ということにほかならない。そして, 発話者は, 主体の関与(打ち込み)に通常の量・度合いを越える「追加」があるということを *se* で表示すると考えられる。

「se 構文」に対応する事態の概念構造は, 次のように図示することができる。横軸は, 事行(対象 P を思い描く行為)への主体の関与(打ち込み)

の量・度合いを示す。中央の縦線より右側は、通常の関与を越える「追加」の部分を示す。

図 2



### 3. douter

#### 3.1. douter の基本的機能

まず, douter の基本的機能を確認しておこう。douter を含む統語形式としてよく見られるのは, <N + V + de N> と <N + V + que N Sub> である。主節と従節が同一主語の (20) のような発話もよく見られる。

- (17) Washington *doutait* de l'existence de ces accords secrets.
- (18) Je *doutais* de son honnêteté / de son impartialité.
- (19) Les linguistes *doutent* aujourd'hui de ce qu'ils affirmaient hier.
- (20) Je *doute* que j'en sois capable.
- (21) Je *doutais* que la directrice puisse vous recevoir.
- (22) Clarisse *doutait* que notre fils ait réussi au concours.

その他の統語形式としては, <N + V + (de) Inf> を挙げることができる。

- (20') Je *doute* d'en être capable.
- (23) Clarisse *doutait* d'y arriver facilement.

インフォーマントの一部は, de を用いない発話もときに容認する。このような判断のゆれが見られるのは, craindre, vouloir などとちがって douter の場合は (20) のような主節と従節が同一主語の発話をよく用い, <N + V + (de) Inf> の統語形式の使用頻度が高くないからであろう。実は, このことは

douter の基本的な機能と深く関わっていると考えられる。

周知のとおり、douter はラテン語 dubitare に由来する。dubitare の “hésiter entre deux choses, être indécis” という意味 (*Dictionnaire Historique de la Langue Française*) は、現代でも douter で表すことができる。たとえば、次の (24) は “Cesse d’hésiter!” とほぼ同義である。

(24) Cesse d’en douter!

フランス語辞典は、多くの場合、douter の語義を “être dans l’incertitude de la réalité d’un fait, de la vérité d’une assertion ; mettre en doute ; ne pas avoir confiance en qqn, qqch” (*GR*) のように記述している。このような語義なら、事態について断定をためらう場合に、あらたまった文体で <N + douter + si N Ind> の統語形式が見られることも納得できる。

(25) Clarisse doutait elle-même si elle n’avait pas rêvé.

(26) Je doute si, dans sa situation, j’agisrais comme elle.

一方、FRANCKEL et al. (1990) は、“Douter marque l’impossibilité pour un sujet Si d’opérer une quelconque détermination relativement à X/Q construit indépendamment de Si” としている (p. 144)。つまり、douter は、事行主体が事物・事態についてはっきりさせられないでいる状態を表すわけだが、事物や事態は、imaginer や penser などの場合と異なり、事行主体自身が構築するのではなく、状況・文脈から事行主体の意識にのぼっているのである。このことによって、<N + douter + de N> の N は定名詞句が多いことや <N + douter + (de) Inf> の使用頻度が低いことなどが説明できる。

以上のことから、douter の基本的な機能は次のような事行を表すことだと言える。

(27) 事物・事態について、蓋然性が高いととらえようとしつつためらっている。



このように, *douter* が表わす事行のはじめには事物や事態の存在・生起を肯定しようとする姿勢がある。それなのに, しばしば否定的な認知行為を表すかのように見える (cf. 日本語の「うたがう」) のは, 事物や事態の存在・生起をそのまま受け入れずにためらっている姿勢を示すことから生まれる語用論レベルの表現効果だと考えられる。その場合, 蓋然性が高い事態として提示するわけではないので, 従節では直説法を使う理由がないことになる。

### 3.2. *douter* の「se 構文」

「se 構文」としてよく見られる統語形式は, <N + se + V + de N> と <N + se + V + que N Ind> である。

- (17') Washington *se doutait* de l'existence de ces accords secrets.
- (28) Je *me doutais* bien de l'échec de son fils.
- (29) Elle *se doutait* de ce qui se passait au secrétariat mais n'osait pas intervenir.
- (30) Je *me doute* que j'ai bien compris cette théorie.
- (31) Clarisse *se doutait* qu'elle ne leur plaisait pas.
- (32) Je *me doutais* bien qu'ils allaient avoir des ennuis.

これらの発話例の場合, 発話者は, 事行の主体が対象 (<de N> または <que N Ind> で表わす事物・事態) の蓋然性がある程度高いと評価しているということを表わしている。

<N + se + *douter* + (de) Inf> の統語形式の発話は, すべてのインフォーマントが容認するわけではなく, 容認する場合も <(de) Inf> で表す事行のタイプに関してかなり制約があるようだ。

- (30') ?Je *me doute* d'avoir bien compris cette théorie.
- (31') ?Clarisse *se doutait* de ne pas leur plaire.

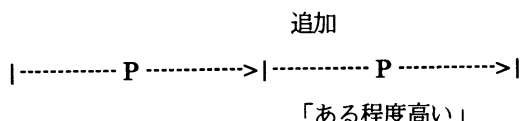
インフォーマントがこのような発話を必ずしも容認せず, 主節と従節が同一主

語の場合でも上の (30), (31) のように <N + se + douter + que N Ind> の形式で表す方が好ましいと判定するのはなぜか。それは、事物・事態が（発話者自身が構築するのではなく）状況・文脈から事行主体の意識にのぼっていることであり、また、事態を蓋然性がある程度高いものとして提示しようとする発話者の意図には不定法より直説法節の方がうまく適合するという一般則が働いているためであろう<sup>(6)</sup>。

(17)・(32) からは、事行主体が事物・事態の蓋然性について「高いと評価することをためらう」のをやめて「ある程度高いととらえる」ことを表わすときに発話者は「se 構文」を用いる、と説明できそうである。しかし、蓋然性の高さが問題になるのは、たまたま *douter* の表わす事行の内容のためである。実際、この事行の場合に主体が事物・事態の蓋然性を「ある程度高いととらえる」ということは、「高いととらえようとする」姿勢で始まる事行への主体の関与（打ち込み）が通常よりそれだけ多い・強い、ということにほかならない。上で見た他の認知動詞の場合と同じく、*douter* の場合にも主体の関与（打ち込み）に通常の量・度合いを越える「追加」があるということを *se* で表示すると考えられる。「蓋然性がある程度高い」は、*douter* の表わす事行の内容と「追加」の組み合わせから生まれる表現効果と言ってよい。

こうして、「se 構文」に対応する事態の概念構造は、次のように図示できることになる。横軸は、事行（対象 P を蓋然性が高いととらえる行為）への主体の関与（打ち込み）の量・度合いを示す。中央の縦線より右側は、通常の関与を越える「追加」の部分を示す。

図 3



#### 4. おわりに

上では、事行に対する主体の関与（打ち込み）に通常の量・度合いを越える「追加」があるような概念構造の事態を認知動詞を用いて表わす場合に、発話者が「追加」を *se* で表示することを見た。

実は、事行に対する主体の関与（打ち込み）の「追加」を *se* で表示するという説明は、事行の主体が対象を兼ねるようなような概念構造の事態を (01), (02) のように表わす場合にも適用することができる。実際、主体の「事行への二つ目の関与」を「追加」のひとつのヴァリエーションと見なすことは不自然ではない。こうして、<N + *se* + *attendre* (+ à ...)>, <N + *se* + *y* + *connaître* (+ en...)>, <N + *se* + *entendre* (+ avec...)>, <N + *se* + *intéresser* (+ à...)> のような「*se* 構文」は説明できることになる。

また、<N + *se* + *décider* (+ à ...)>, <N + *se* + *essayer* (+ à ...)>, <N + *se* + *refuser* (+ à ...)>, <N + *se* + *risquer* (+ à ...)> のような「*se* 構文」も、事行に対する主体の関与（打ち込み）の「追加」によって説明することができそうである。おそらく、われわれの仮説は、すべての動詞の場合について説明力を発揮するであろう。そのことの確認は、稿をあらためて行なうことにしたい。

#### 注

1. 西村牧夫氏（西南学院大学）に提供していただいたデータが非常に有益であった。また、Marne-la-Vallée 大学大学院で行った講演（2002.04.03）の際の出席者との質疑応答からも多くの示唆を得ることができた。
2. インフォーマントはフランス人7人。とくに Jean-Paul HONORÉ 氏（Univ. Marne-la-Vallée）と Alain THOTE 氏（Univ. de Paris 4）には長時間の面接調査に応じていただいた。
3. 曾我祐典（1998, 1999, 2000a, 2000b, 2001）を参照。
4. 出典を示していない発話例は、インフォーマントの協力を得てわれわれが作ったものである。

5. 発話時点以外の事態を表す発話中の "je" の指示対象は発話時点における発話者とは異なる主体である。
6. <N + se + douter + (de) Inf> を容認するインフォーマントも、「直説法節の発話のもつ明確さ *clarté*, 強さ *intensité* を欠いている」という意味のコメントをする。

### 主要参考文献

- DUCROT, O. (1980) : *Dire et ne pas dire*, Hermann.
- FRANCKEL, J.-J. et al. (1990) : *Les figures du sujet, A propos des verbes de perception, sentiment, connaissance*, Ophrys.
- MÉLIS, L. (1990) : *La voie pronominale La systématique des tours pronominaux en français moderne*, Duculot.
- 曾我祐典 (1998) : 「『思い描く』を表わすフランス語の <se+動詞>」, 『年報・フランス研究』32, pp. 55-67.
- 却却 (1999) : 「se douter の機能」, 『人文論究』49-1, pp. 21-33.
- 却却 (2000a) : 「douter, imaginr の否定文発話」, 『人文論究』50-1, pp. 32-43.
- 却却 (2000b) : 「動詞 intéresser の機能」, 『関西学院大学創立 110 周年記念論集』, pp. 209-221.
- 却却 (2001) : 「se をともなう douter と intéresser」, 『フランス語学研究』35, pp. 93-95.
- 春木仁孝 (1997) : 「意味カテゴリーとしての再帰 却現代フランス語の場合却」, 『言語文化研究』23, pp. 177-200.

(文学部教授)